岐阜経済大学論集 29 巻 4 号（1996 年）

〔翻　訳〕

癸丑日記（中）

作者　仁穆大妃内人
訳者　梅山秀幸

十九

こうしたことがあった翌日，若い宦官のヨナムウンがみなの中からただ一人進み出て，中門を開けた。そうして，若い女房二人，監察尚宮のエオク・コッヒャン・恩徳・カプ，色掌の女房三人，下婢二人，その他六，七人がいっせいに押し込んで来た。われわれの御殿の女房たちは恐れおののいて，部屋の隈の方に身を寄せていたが，入り込んで来た女たちはどっかと寝室に座り込んで，

「何が不満で，何があきたらなくて，このように頑固なのですか。永昌大君のところに調布がないのか。明礼宮に調布がないというのか。何も不自由はないはずで，『大妃』の称号もさし上げ，大君のお生命も救おうとしているのに，どうしてまだこうして逆謀をたくらみなさるのか。幼な子には何もわかるまいに，悪事をし出かし，その後でいったいだれのせいにするおつもりか。早く大君をお渡しください」

といった。話が根も葉もないことで，あまりに乱暴で，とても聞くにたえない。とんでもないいいがかりなので，みなが黙々としていると，その者たちがどなりながらいう。

「図星を突いたものだから，口はあっても，どんな答える言葉も見つからず，答えられないのだろうよ。口をつぐんでいるのも，もっともだ。お前たち女房が大君をすみやかにお出ししろ。いささかでも遅滞すれば，お前たち女房もみなたちまちに死んでしまうことと思え」

大妃さまはほとんど人事不省のありさまで，息も絶えんばかりでいらっしゃったが，やっとのことで気を取りなおし，お側に仕える女房の主だったもの四,五人を近くにお召しになって，お話しになった。

「お前たちも人として，このわたくしが濡れ衣を着せられ，悲しみにくれていることを知らないわけはあるまい。わたくしが戊申の年（1608）に死なずに生き残ったのは，光海君とて同じく先王のお子であって，二人の幼な子を托しても平安に生きることができようと考えてのことだった。ところが，数年がたち，一日として安らかな日がなく，百もの心配だけをしてようやっとのことで生きのびて来た。まったくの凶賊を相手にして，この天下に容認することのできない大逆という罪を，あろうことか，さかさまにわたくしらがひっかぶる。天もそれを知らずに，このような濡れ衣を，弁明してくれもしない。わたくしとてどんな話ができよう。今，日がまた過ぎて，父と兄とを殺されてしまい，また宮中の近侍の女房もみな連れ去られて，殺されてしまった。幼な子の身には罪が及ぶことがなく，だから大君をお出しするようにということだが，いかがなものか。今すぐにでも，あなた方の眼の前でわたくしは死んで，あえて，このようにむごい，悲しい話を耳にしたくはないものだ。光海君とお妃の申し出がわたくしの耳に残っているが，あなた方が証人となってくれますね。王がまさか国母のわたくしをだますことはありますまい。普通の人の約束ではなく，何度もねんごろに話して来たことですからね。わたくしは百回信じることとし，大君をお出しするかわりに，二人の兄弟を許してくださり，彼らを母上に仕えさせ，先祖の祭祀を絶やさぬようにしていただこう。そういうお約束なら，大君をお出ししてもよいと，光海君とお妃には伝えて欲しい」

そうおっしゃって，哀慟なさったが，それを回りにいる者たちは，人として，どうして涙なく聞くことができようか。ところが，光海君から遣わされた者たちは，無惨にも，

「そんなことをつべこべと今さらおっしゃらずとも，光海君は先刻御承知の上で，事をお運びになりましょう。さっさと大君をお出しください」

とせっつくありさまである。

二十

どうしてもお出しすることができず，大妃さまが慟哭なさることもきりがなく，二人のお子たちもいっしょにお泣きになる。大妃さまは，

「天よ，わたくしがいったいどんな罪を犯したからといって，このような悲しみを味わわなくてはならないのか」

とお叫びになって，あまりに悲しげにお泣きになる。それを聞けば，たとえ鉄石のような心を持った人間であっても涙を流さないわけはなかろうに，遣わされた女房たちはぎっしりと囲んで，

「お前たちが悲しげに泣けば，大君をお出し願えないから，笑顔をつくって，さっさと中へ入ってお急がせするのだ。悲しげな顔で入って行くようなら，みんな殺してしまうぞ」

といって，おどしつける。そこで，みなそれぞれに涙をひた隠しにして入って行き，申し上げる。

「すでに虎につかまって，逃がれるすべもなくなってしまいました。御病気がちの実家の方が今に生きながらえていらっしゃるのも，大妃さまをすべてにわたって信頼されているからで，そうでなければ，亡くなった府院君の遺骨の始末もきちっとできはしますまい。お二人の兄弟の生命さえお救いになれば，家の祭祀は絶えることがありません。しばらく悲しみに耐えて，大君をお出しください」

日はだんだんと暮れて行き，大君を早く出すようにやむことなく催促して来て，女房たちも進み出て説得する。たとえ天をうち砕く力があったところで，どうして抗うことができようか。しだいに暮れなずんで行って，われわれお側に仕える者をどやしつけて，

「お前たちがぐずぐずしているので，仕方なしにわれわれが中へ入って，大君をひったくってお連れしよう。お前たち一人でも生きのびられるかどうか，後で見物することにしようよ」

と強くせまったので，年老いた卞尚宮がふたたび足をはこんで，大妃さまに申し上げる。

「御殿の内外に壮丁たちが遣わされて，門外には義禁府の下人たちが鎖を持って囲み，女房たちを連れて行こうと，医女隊も待機しています。わたくしどもが死

ぬのはいっこうに悲しいことではございませんが，大妃さまが他に頼る方とてなく，この年老いたわたくしをお側近くに召し，わたくしも大妃さまを頼りにし，糸のような玉体にもしもの不幸なことが舞いかかって来たら，わたくしが身を挺してでも防いでさし上げようと存じて，生きのびてまいりました。しかし，今，大君をお引き渡しにならないから，これがとうとう最期なのだと悟りました」

それに対して，大妃さまはお答えになった。

「お前たちは宮廷で女房として過ごして子を持たず，親子の情というものがわからないのです。あたり前の人情として，大君を引き渡すことなど，とてもできはしない」

その一方で，大君にお仕えする女房たちが大君御自身をおなだめ申し上げる。

「三,四日だけ，遠出をいたしましょう。足袋をはき，上着をお召しになって，わたくしといっしょに出かけましょう」

大君がそれに答えて，

「罪人として，罪人たちが出入りする門から，わたしは出て行こうとしている。どうして罪人が足袋をはき，上着を着る必要があろう。すべて無用だ」

とおっしゃる。

「だれがそんなことを申しましたか」

とお尋ねすると，大君は，

「人が言ってくれて知ったのではなく，わたしは自分で悟ったのだ。西小門というのは罪人たちが出入りする門ではないか。わたしも罪人として，その門を出たとたんに，つかまえられてしまうのだ」

とおっしゃり，つづけて，

「お姉さまといっしょだったら出て行こうが，わたし一人で出て行くのはいやだ」

とおっしゃった。大妃さまはいよいよ悲しんで，おなげきになった。

早くお出しするよう，重ねて催促が来て，

「お出しにならなければ，女房たちをみなつかみ出します」

といって，捕縛の者たちが多勢で入り込んで来た。大君にお仕えする金尚宮をつかまえて，

「いつも泣いてばかりで，ちゃんとお仕えもしない。こんな者は獄にぶちこめ」

などという。金尚宮は，

「どんなになだめて，みずからお出になるように説得しても，大君はこのようにお泣きになって，お動きにならない。罪人が出入りする門からお出ししようとすれば，どんなに幼い子でも気がついて，いやがろうというもの。それをどうして，こうもせっかちにするものか。わたしがお付きして出て行きますので，しばらく後に控えていてください」

といった。

二十一

日は暮れて行くが，あまりに気の毒なので，責めることはせず，大妃さまは鄭尚宮が背負い，公主さまはチュ尚宮が背負い，大君は金尚宮が背負って出て行くことにした。大君は，

「大妃さまとお姉さまが先にお出になってください。わたしは後からついて行きます」

とおっしゃる。

「どうしてそんなことをいって，後に回ろうとなさるのか」

と申し上げると，大君は，

「わたしが先に出て行くと，わたし一人だけを先に出して，お二人はお残りになりはしないか。わたしはお二人がちゃんと出られるのを見て，後からついて行こう」

とおっしゃった。

大妃さまは無地の木綿の喪服で，やはり同じく木綿の裾をかぶり，二人のみ子も藍色の裾をかぶって，それぞれ尚宮たちが背負って差備門に至った。そこには宦官たち十人あまりがひれ伏していて，

「早くお出になってください」

と申し上げる。大妃さまは宦官たちにおっしゃる。

「お前たちも先王の禄を食んで久しく生きて来て，この事態をいたましく思う気持ちがないということはまさかあるまい。わたくしは十年あまりも正室の位にあったにもかかわらず，なかなか男子に恵まれず，丙午の年（1606）になってやっと大君を得てよろこび，これを愛すること他に比較するものがないほどでした。当時はただ襁褓にくるまれた赤ん坊に過ぎず，何も特別な野心も持たずに，ただ

ひたすらに成長する様子を見守っていたものを。王様が亡くなって，わたくしもそれに殉じて死んでいたなら，今日このように悲しい目には会わずにすんだろう。これもわたくしがあのとき死なずに生きのびた罰で，幼くて，東西すらわからない者を引っ立てるとは。朝廷も台諫も，すべてが先王の御恩を考えれば，どうしてこのようにむごく，悲しいことができるのだろう」

そうおっしゃって，お嘆きになったが，宦官たちももらい泣きした涙をふいて，口を開けて話もならない様子で，ただ，

「早くお出になってください。われわれとて情を知らぬわけではありませんが，さりとてこのままにして置くこともできません」

と申し上げた。

そうして，女房のヨンカプは大妃さまを背負った女房の腰にすがり，恩徳は公主さまを背負うチュ尚宮の腰にすがって，歩けなくさせ，大君を背負った者だけを前に引っぱり出し，後から押し出し，門外に出してしまい，自分たちは門の中に帰って，差備門をぴたりと閉めてしまった。そのお気の毒なことといったらなかった。大君だけが門外にかつぎ出され，かついでいる者の背に頭を何度もぶつけて，泣きながら，

「お母さま，お出でください」

と叫んでも，どうしようもなく，

「お姉さんも，おいで」

といって，ひどく悲しみ，泣きさけばれたので，それにつれて，内と外とで泣き声が天地を震動させ，涙が地面をうるおした。人びとの眼にも涙があふれて眼がかすみ，たどるべき道もわからない様子だった。

大君をなんとか門の外に出し，その身辺を包囲し，環刀と弓矢をたずさえた軍将が脇をはさんだ。そのときようやく，大君は泣くことをやめ，頭をうなだれ，眠っているかのように，背負われて去って行かれたのだった。

二十二

大妃さまはもどっておいでになり，天に向かって大いに叫び，なげき，何度も気をお失いになったりなさる。人のいないときに首をくくろうとなさったり，刃物で自決をしようとして，人びとをみな追いはらったりなさったが，卞尚宮が大妃さま

のそうした目論見を察して，昼夜おそばを離れず，互いに向かい合って座って，さまざまにお慰めして申し上げる。

「御実家の方でも，また大妃さまにおかれても，今まで少しも変わることなく，善行を積もうとお心がけになり，人をひとりとして害することもおありでなかったのに，天はどのような過失を見て，こうした悲しい眼に遭わせようとするのか，わたくしにはわかりません。いつの日かきっとこの悲しみを晴らすことができようと存じます。大君のお歳はまだ十歳にもなっておられず，よもやこれを殺すなどということはありますまい。門を開き，ときおり外の消息や安否をお尋ねになったなら，自然と大君の安否もわかるようになりましょう。大妃さまがお生きながらえであったなら，御実家の祭祀も絶やすことがなく，われわれ小人どもも今までのようにお側を離れずにいられます。御実家のお年寄りたちはいったいだれを頼りに生きていらっしゃるというのです。大君のためにいっそ死んでしまおうとなさるが，それは御両親のために大いに不孝です。御実家の御母上のことをお考えになって，みずから死のうというお気持ちをお捨てになってください。しばらくの間，この悲しみに耐え，門を開け，御実家の方たちと会って，この沈重で，悲しい目をも互いにお晴らしになってください。公主さまも同じくお子さまで，たとえ女子であったとしても，それを見捨ててお亡くなりになったなら，公主さまはこれからどこに行き，だれを頼って，お生きになればいいのでしょう。親戚に引き取られて大人になったとしても，孤りの悲しみをどこのだれに打ち明けることがおできになるでしょう。幼い人であったとしても，弟の生きることを誤ったのを必ずお知りになります。いわんや大妃さまがまずお亡くなりになれば，それはそのまま大君を殺すことにつながりかねません。そんなことになって，公主さまはいつ平安にお過ごしになれるでしょう。今にきっと光海君は邪悪なることを試みて，公主さまもつかまえて殺し，大妃さまが国母の座にいらっしゃって，二人のお子をお持ちであったことすら歴史の闇に埋めてしまいましょう。あるいは心の中で陰謀をこらし，呪術を行って，それが発覚して殺されることになってしまったと史書に記録されることになって，その立場は人としてとても耐えしのぶことのできないものです。このように悲しいことはありませんが，今死んで，後世に大妃さまのお名前が汚れたまま伝わることは，深く憂慮すべきことではございませんか。わたくしめのこの愚かしく，うるさくて迷惑千万で，獣に劣るような意見でも，お聞きくださって，どうか今はこの悲しみに耐えて，

多少は先き行きのことをお考えになってくださいませ」

そういって大妃さまをおひきとめ申し上げるのに対して，大妃さまはおっしゃる。

「わたくしだって，どうしてそんな道理がわからないことがあろう。汚れた名をすすごうとしないというのも，悲しみで心がちぎれ，骨が砕かれるようで，はらわたが煮えかえり，心肝に火がついたようでどうしようもないのです。あとさきのことの配慮など秋毫もなく，この人間世界からすみやかに離別するために，自決しようと思うのです」

そうして，少しの間も休むことなく，哭を上げ，飲食を召し上がらず，ただ冷水と氷をお口にされるだけ，日ごとにお母上の安否と，大君の安否とを，門を開けて，調べて来るようにお頼みになる。大君はあれほどまでに言葉をつくろって，あやして連れて行ったのだが，一日に一度だけ内需司でお見舞いすることを知って，しきりに人を行かせるようにして，大君の召し上がる飲食物などを持って行かせた。しかし，禁軍の兵士たちがその一つ一つを広げてあさってみて，光海君や妃のところに運び，周りの者がどういうかを見きわめた後になって，ようやく大君のもとに届けられるのだった。

二十三

こうしてひと月が経って，大君を江華島へ移すことになったが，それをあらかじめ知らせて来ることもなかった。その日，安否を伝えてくれる人もなかなか来ないので，はなはだいぶかしく，あらためて心配になって，大君に届けるお菓子や肉を包んで盛り，寝室に用意して置かれた。日ごろ好物だったお菓子やくだものの種や，お習字の筆のようなものをお側に置いて，

「どうして今日はいまだに安否を知らせて来ないのでしょう。きっと何かがあったのでしょう。だれか高い所に上がって，宮廷の外の往来の様子でも見て来て欲しい」

とおっしゃった。そこで，以前，寝室として使われていた高楼の方へ行って見たところ，人びとが敦義門のところに集まっていて，城壁の上に登って見下ろしている者たちもいる。その数を数えるのがむずかしいほど，人びとが立ち並んでいて，弓矢をたずさえ，日の光にきらりと光る槍や刀を持つ者たちが多勢いる。その中を馬

に乗った一団が旅立って行った。

見ていると，あまりにかわいそうな気がして，涙が自然とにじみ出て来るのも知らず，最後まで見届けようと決めたが，一団がどこに行こうとするのかわからなかった。間もなく黒い簾をかけた轎がかつがれて行き，女房たち二,三人が甲をかぶって馬に乗ってついて行った。聞こえて来る声が以前にも聞いたことのある声で，そのときやっと，今殺されようとなさっていると思って，大妃さまには

「いくら見ていても，どこに行かれたのかわかりません」

とお伝えしたが，悲しい思いはとても抑えることができない。

地下の者たちが道路工事をしているところがあって，そこに出かけて，こっそりと聞いてみると，

「大君を江華島に流すなんて，かわいそうなこった」

と話していた。そのときになってやっと，大君が江華島に流されなさったことがわかったのだったが，数日たっても安否を知らせないまま，正式には江華島にお流ししたことすら，こちらには秘していたのだった。

大妃さまは女房を何度もせっつき，

「早く御無事かどうか調べて来て欲しい」

とおっしゃるが，いったいどこへ行けば，大君の安否が知れようか。また，宦官たちには，

「安否が知れないというのは，配所におもむいて数日も経とうとしているのに，いったいどうしたことか。約束とちがうではないか。食べる物は存分に用意するということだったが，人君としてまさか人をだますような真似はなさるまいと思っていたものの，今の今となってやはりあざむかれていたことがはっきりした。いったい大君はどこにいらっしゃるのかだけでも教えて欲しい」

とおっしゃるのだが，宦官たちはお答えすることができない。

大君がまだ連れ去られる前，金尚宮に背負われて，悲しみにこらえられず，お泣きになって，

「わたしの足を洗って欲しい。お風呂にも入りたい」

とおっしゃった。金尚宮が

「お風呂など大人が入るものです。何のためにお風呂に入ろうとおっしゃるのですか」

といって，さらに

「どんなことで，そのように悲しんで，お泣きになっているのですか」
と尋ねたのだが，大君は泣きむせび，さらに悲しんで，いっかなお泣きやみにならず，六月二十一日になったのだった。
「今日はいったい何日だ」
と，大君がお尋ねになる。
「何日かを知って，どうなさるのですか」
と聞くと，大君は，
「知る必要があって，尋ねるのだ」
とおっしゃって，いっそう悲しげにお泣きになったので，左右の者はみないぶかしく思ったが，はたして六月二十一日に，大君は連行されなさったのだった。精神が鋭敏でいらっしゃったから，御自身が遭遇することになるわざわいをあらかじめ御存知のようであった。
大妃さまはますます悲しくて，食事を召し上がらず，昼夜をいわず，ただお泣きになるだけで過ぎて行ったが，周りの者がしきりにすすめるので，黄粉を水に溶かしたものをようやく小皿に取って召し上がった。それも一日に一度お召し上がりになるかどうかで，卞尚宮が泣きながら，しきりにお願いする。
「そんなにお泣きになるのなら，せめて喉をしめらせてから，お泣きになる方がよろしいでしょう」
そう申し上げたので，ようやっと，二口，三口，お召し上がりになったのだった。

二十四

癸丑の年（1613），甲寅の年（1614），乙卯の年（1615）の三年の間，大妃さまは黄粉を蜂蜜に混ぜたものを一日に一度しか召し上がらなかった。
「大君の消息を調べて欲しい」
とおっしゃって，お見舞いに来る宦官にどれほどお頼みになっても，宦官は聞くふりもしないのだった。
だいたい御殿の中に女房十余人と，表に壮丁の宦官十余人を置いたのは，大妃さまが大君を連れもどすためにお出かけにならないか心配して見張るためで，内外で厳重に監視し，門をすべて閉じ，中門もぴったりと閉めきって，とても口にできな

いようなことをいったりする。

女房の子どもたちが泣きでもしようなら，恩徳とカプが叱りつけて，

「これこれ，何を泣くのだ。大君が死のうが生きようが，お前たちに何の関係があろう。泣くんじゃない。お前たちの母親か父親が死んだら，泣けばいい。大君のことなどで，泣くんじゃない。泣いている眼に灰を入れるぞ」

などといい，なぐりつけた。ひっそりして，人が出歩くこともなかった。

ひと月ほど経っても，江華島にお流ししたという話もせず，消息をお聞きすることもなかった。大妃さまはいよいよ心配になって，悲しんでいらっしゃった。

御実家の母君が亡くなられたか，生きていらっしゃるかも知ることができず，お見舞いに来る宦官に，

「門を開けて，せめて老母の生死についての消息でも聞いてから，死なせて欲しい」

とおっしゃって，くり返しお頼みになったが，宦官たちはそれにお答えもしなかった。そこで，宦官たちをお叱りつけになったところ，一人の宦官がいい返した。

「逆賊の家ということなら，本来，三族をみな殺しにし，その家を滅すのが当然なのに，われらがそれを押しとどめ，内需司にいって，お食事だけでも届けるよう奔走したので今があるというのに，それに味をしめて，今度は門を開けて年老いた母親の消息だけでも知って死にたいなどと懇願なさるようなざまだ。お前たち女房が腰を曲げて膝まずき，『御母上の消息だけでもうかがいたいものです』などとせがんだところで，どうしようもないことなのだ。こんな話を二度としたら，お前たちをみな殺しにしなければならない。いいか，二度といってはならないぞ」

この年の秋，もう一度，門を開いてくれるよう，宦官を通して請うたが，千度請うても一度として返事もなく，ようやく宦官を通して，

「こうして一年，二年と門を閉めて置いて，三年目はさてどうしたものだろう。捕えることのできなかった朴致毅さえ捕えることができたら，門を開けてもいいのだが」

という言葉が伝わって来た。

二十五

大妃さまの御誕生日のこと，光海君妃は特別にお祝いを奏する宦官を遣わしたが，これに大妃さまはお答えになって，

「昔は妃のお姿を拝見して感激したものでした。わたくしも人であり，妃も人であって，人情は同じもののはずです。光海君はいろんなことにいいがかりをつけ，わたくしの親と兄弟をみなひきずり出して殺し，大君までもひきずり出して，どこへ行ったという話も教えてくれない。大方，危害をこうむっており，その悲しみはたとえようもないのに，死ぬこともままならない。生きて，老母の安否を聞こうと，昼も夜も気が気でない状態です。どうか門を開けてくれて，いいのか，悪いのか，安否だけでも知った上でわたくしが死ねるようにはかっていただければ，御恩は地下に行ってもけっして忘れませんし，死んでも，安らかに眼を閉じることができます」

とおっしゃったが，それに答えることがなかった。

この年，正月初めになって，お見舞いをさし上げる宦官にまた同じようにお頼みなさったが，これにもまた，どんな答えももどって来なかった。

女房というものはもともと務め先のことだけに専念して，外にいる両親や兄弟たちが世間のことを後見してくれるものだが，親兄弟が門前を通り過ぎたとしても，門を開けて入るすべもなく，心をいため，悩むばかりである。自分たちの着ている服にしても，最初から死ぬのか生きるのかわからず，もし不幸なことがあっても，今自分たちが着ている服で死体をおおうことにしようとしている。大妃さまは大君とともに死にたいと思うものの，その死生がわからず，当座にお召しになる着物以外はすべて外にやっておしまいになった。事例をおしはかって見るに，上下がみずから死ぬことが同時ではなく，当座のところはみな生きている。過ぎた日をふりかえってみると，あまりに悲しく胸にせまり，配置された宦官に女房たちみながどんなにかとりなしてみるものの，宦官たちは聞くふりもせず，また実際に一向に聞いてくれもしない。女房たちが隈の方で泣いていると，大妃さまが女房たちに着る物を与えて，

「悲しみにも今少しだけ耐えてください。わたくしは国母でありながら，他人につかまえられ，人質となって，今や一日に二度だけ実家の消息を知るようなあり

さまとなった。しばらくの間もそばを離れず，昼夜となくいっしょだった大君までお出しした。お前たちも少しはこの苦しみに耐え，わけもなく宦官たちに内情をぺらぺらと話さないようなさい。何といえばいいのか，こうした鉄桶の中に入っているような状態で，一度も外からの消息を聞くことができず，悲しむすべもわからない。上下たがいに消息でも確かめ，平穏に過ごせるように考えて，現在の虎がいよいよ暴れ狂うような時世に心して生きのびることを考えて欲しい。隙をうかがって消息を知ろうという考えはおやめなさい」

と何度もおっしゃったので，

「これからはいたしますまい」

といった。

しかし，耐えしのぶことはむずかしい。外の行廊に大きな門があり，本来は開かずの門であり，兵士たちがつめて，賓庁の庭をきびしく見張っているものの，あるいはひょっとして下婢たちが往き来しないかと様子をうかがった。しかし，消息を伝える方法もなく，三月が過ぎた。

当時は考えもしなかった艱難に遭い，正殿にいらっしゃれず，後宮といい，正賓といい，いらっしゃった棟は同じであっても，藁席をしいて座し，御実家の喪も，この悲劇をも耐えてお過ごしになったのだった。

二十六

女房の中還とキョンチュンという者は以前から宮仕えをしていたが，もともとキョンチュンは懿仁王后の親元の家の下女であって，主人の三年の喪が明けて，寝室尚宮がことばだくみに推薦したので，お側に仕えるようになったものだった。年老いた女房たちは，

「あちらの下女であった者が只今はお側近くに侍っている。仕事をまかせるのは不都合です」

と申し上げた。大妃さまはそれを聞いて，

「それは物を知らないもののいう言葉です。わたくしは国母なのです。前の王妃の下女だからといって，どうしてわけへだてができましょう。懿仁王后のところの下人たちは本来よく働くと聞いている。王后も心の寛いお方だったが，上が立派であれば，お仕えする下人たちも善良だといいます。下人たちは職をまっとう

することが大切で，昔と今とを区別しないで使うべきです」

とおっしゃって，寝室の灯燭を明るくする役目をお言い付けになった。中還は後宮の女嬬として幼いときに宮廷に入ったものの，役立たずで，何度も宮外に追い出されたような小人だったが，やはりキョンチュンと同じ役目をおおせつけられ，灯燭の係となった。トクポクは婚家の関係でやって来た下人に過ぎなかったが，宿直房の灯燭を明るくする役目となったので，昔からお仕えしていた女房たちは，

「人を信じるあまり，こんなにまでなさったが，大妃さまのお心の寛さは比較するものがない。昔にもまったく例のないことだ」

といい合った。

それまでまがまがしいことは起こるまいと安心していたところ，中還自身の兄が印章を偽造した事件が明るみに出て，みなが拷問を加えたというので，中還は大殿を恨むことが日々につのって行った。怨悪の気持ちを抑えることができず，公然と恨みの言葉をたびたび吐くようになり，聞く者はわずらわしくなり，心の中でもそんなことは考えないようにさとしたものだった。中還が怨望している事実を，ようやく介屎というものが知って，中還に取り入って，なだめながら，たらしこんだ。

「お前もわたしがいうことを聞いてくれれば，わたしの方もお前の兄をなんとか生かしてあげようじゃないか」

こう約束された後に，中還は進上すべき銀の食器を盗んで，介屎に手渡したのだった。

すなわち，壬子の年（1612）の六月十八日，王子となられた慶平君の誕生日であったが，焼厨房の下人たちがお食事を受け取りに行った間を利用して，中還は隙をうかがい，キョンチュンは閉じた門のとっ手を開け，銀の食器を取り出して，介屎に手渡した。人びとはひそひそとおしゃべりして，

「キョンチュンと中還とは一味だ」

と噂し合ったが，寝室尚宮たちは少しも疑わず，だれも言葉をはさまなかった。中還はただ自分の兄のことで怨みを抱いており，キョンチュンは少しでも自分よりも上の尚宮を見ればへり下り，膝まずいて，うっ伏してあいさつをし，頭を上げて話をすることもできないような人間だった。いったいだれが彼らを疑うことを考えただろうか。

占い師に失くなった品物の行方を問うと，

「盗賊の姿を占うと，頬がやや赤味を帯び，他人と話もできないような人が持っ

て行って，人の手の及ぶことの困難なところに手渡した様子。さがし出すのはとても無理でしょう」

と答えた。そこで，みなが，

「キョンチュンの顔色は蒼白いが，あの者が持って行ったに違いない」

というのだが，うべなわずに，

「いやいやキョンチュンは無実でしょう」

という者もいる。

二十七

この者たちはまるで事を楽しんでいるかのようで，夜ごとに門を抜けて出入りし，大妃さまや公主さまが何をお召しになっているか，内人たちが何を食べたかまで，すべてを介屎にいちいち報告し，そうした手柄で，自分の兄をやっと帰してもらったのだ。

わたくしたちはこの者たちが内通しているとは夢にも思わなかったが，癸丑の年（1613）に兵乱が起こったとき，この者たちはそうなることをあらかじめ知って，介屎の心腹となったのだった。しかし，わたくしたちの眼の前では，いっそう人目に立つように，悲しがるふりをし，地団太を踏んで悲痛な形相をしていたので，罪罰をうんぬんすることもなく，尚宮が泣きながら語りかけたものであった。

「お前たち二人をわたしたちが格別あわれに思って使っているのは，二人とも懿仁王后の下女だったからだ。中還は幼い時から出入りしていた者で，お前たちは今後も長生きしようから，わたしたちがいなくなっても，永昌大君が好んで召し上がったくだものでも，節季にでもなれば，そろえて供えて欲しい」

それを聞いて，二人は泣きながら，

「そんなことはおっしゃらずとも，当然わたくしどもがいたします」

と答えた。

心の中には悪心を抱いていても，うわべでは悲しむふりをしていたので，人びとは真実二人は悲しんでいるものと思い込んだ。

壬子の年（1612）の四月，女房たちがみなで宴をし，飲食をして，あちらの御殿の尚宮たちを招いたところ，二,三人が気安くやって来たが，介屎は病気があってといいわけをして，やって来なかった。再三，招んだものの，

「重病を病んだ後なので，参ることはできません」
といって，とうとう来なかった。

夜が更けて，介屎はそっと寝室の側の焼厨房までやって来た。古いキョルマギを着て，冠をかぶり，音を出さない履をはき，焼厨房にそっと入り，またそっと出て，寝室に入って行こうとすると，折しも寝室尚宮が小用をたそうと出て来た。寝室の近くにあまり人気がないのを心配して，他の御殿の人たちもたくさん来ているので，雑下人でも入り込んで来ないかと心配し，寝室の方に入って行こうとした。介屎はそこにいて，金尚宮を見て避けようと思って，門の中に入って行き，金尚宮が近づくと，隠れるところもわからず，うなだれて，扉の後に顔を向け，わなわなとふるえて立っていた。金尚宮はあまりに恐ろしい様子だったので，近づくこともならなかったが，意を決して進んで行き，

「いったいどなたですか」
と聞いた。何度聞いても答えがなく，ふるえているばかりで，介屎であることがわかったが，まだ暗いので，もしや人違いかとも思って，むんずと手をとらえ，

「あなたはどなたですか」
と聞いた。あまりにしつこく何度も尋ねるので，ようやく，

「わたくしですよ」
と答えた。

「介屎尚宮ですね」
というと，

「はい，わたくしです」
と答える。金尚宮がまた，

「どうしてここにいらっしゃったのですか」
と尋ねると，

「宴の様子をちょっと拝見したいと思ったものですから」
と答えた。

つかまえたとしても，訴えるべきところがなく，また，二つの御殿の間がいっそうややこしくなるだけなので，わざと見逃がすことにして，皮肉って，

「病気で来れないとうかがって，さびしかったのに，わざわざ見に来ていただいて，うれしいことです」
といって，そのまま放って置いた。

手首をとらえたときは，生きた魚が跳びはねるように抗ったということだ。

この話を金尚宮がいっさい口外せず，人知れず気配りをして，大君が出て行かれてからはいっそうはばかった。戊申の年（1608）以後，臨海君のことが起こってからというものは，いろいろあらぬ噂が飛びかって，夜昼となく大妃さまと内人たちは心配をして過ごしたのだが，壬子の年（1612）にお触れが出て，大君を憎むことがいよいよはなはだしくなったのだった。

二十八

二つの宮殿の間の門を閉ざし，開けるときには宦官が開け，朝夕にお見舞いにうかがう尚宮がそこを通った。その隙に乗じて，大君を亡きものにしようとしたが，大君が寝室でやすんでいてできず，呪いのまじないだけをして，帰ったりした。

その後，焼厨房の床の下で子どもが声を高く上げて泣き，しきりにため息をつく声がしたので，暮れ方になると，だれもその近くに行くことができず，こわがった。介屎がやって来て呪いを行ったという話も出たが，しかし，その話は無視をして，聞かないふりをし，子どもたちがこわがっても，トッケビ（妖怪）が出るのだとだまして過ごした。中還とキョンチュンとがつるんで，幽霊さわぎを作り出したのだ。

自分の家で呪いのまじないをして置いて，わたくしたちに向かって大乱を起こそうとする。わたくしどもからは中還とキョンチュンには大いに恩恵をほどこし，なすべきことはすべて果たしたはずだった。こちらには他人を害そうという気持ちはいっさいなく，前後の事情を理解してもいず，あちらの宮殿のことなどまったく知らずに，潔癖であった。

癸丑の年（1613）の十一月に中還が言い出した。

「わたしの兄が重罪をこうむり，牢獄につながれているときに，ある僧侶が話をして，獅子経と陀羅尼とを唱えれば，いましめも解け，閉ざされた門もたやすく開き，大小にかかわりなく，どんな厄でも切り抜けることができると教えたので，兄は獄中でいつもそれらのお経を唱え，その利益をこうむって，生きたまま放免されることができました。いささか事情は異なりますが，大君が生きて許され，閉じ込めている門も容易に開くように，じっとあきらめて座っていらっしゃるよりも，心をこめてお経でもお唱えになるのがよろしいでしょう」

大妃さまはそれを聞いて，もっともだともお思いになったが，とりわけ金尚宮が乗り気になって，

「さあ，お経を唱えましょう」

というのを，大妃さまはおたしなめになって，

「お経というものは，もっともうやうやしい心で，誠を尽くして唱えてこそ，徳をこうむるものです。今はみなが心を取り乱し，わたくしの心も夜昼となく哭泣し，心を疲弊させて，悲しんでいる。いったいだれがすすんでお経を唱えることができよう。おやめなさい」

とおっしゃった。

「仏事はすべからく行うべしとか。その利益をこうむり，門が簡単に開き，御実家や御子息の大君の御消息をすみやかに聞くことができるように，座してくよくよなさっているより，お経を唱えるべきです」

と，何度もお願いしたが，

「お前たちだけでも読んだらいい」

とおっしゃるのみであった。

大妃さまのいらっしゃるところは差備門が近く，混雑して物騒がしいが，大君が以前いらっしゃったところは静かで人跡が絶えている。中還のいったことを真に受けて，そこへ行って，ハングルで訓み下したお経を唱えることになった。ところが，中還はむしろ凶悪な心を抱く者で，讒言しようとして隙をうかがった。たまたま自身の兄が世子宮の灯燭の係で，閉めてある門の外に出て，その兄が妹の自分の様子を知ろうとうろちょろしていることを知った。そこで，夜，賄賂をやって見張りの兵士たちとまじわり，兄を呼んでもらって，あれこれと話をし尽くした後で，手紙を書いて，介屎に宛てて送った。

「中門のところまで来てくれたら，こちらでしたことを全部話しましょう」

委細を聞かず，心配にも思ったが，夜中になって，介屎が門を開けてやって来た。介屎は中還を説得して，

「こちらでやっていることを詳しく告発してくれたなら，お前をすぐにでも外に出して上げよう」

といった。中還は手柄を得ようとしても材料が何もなかったから，自分が勧めたはずのお経を唱えていることを取り上げ，

「大妃さまはみずから天に祭祀をなさって，光海君を呪い殺そうと，祈っていら

っしゃる」

といったのだった。このように讒言して，介屎，恩徳，そして東宮の下女のオプカンを連れて入って，そのお経を唱えるところを指さして見せた。しかし，大妃御自身がお出ましになることはなく，たとえお経を唱えた罪でとらわれたとしても，亡き者にすることまではできはしない。しかし，どんなことにでもいいがかりをつけ，わずかに残った女房たちまでも殺し，大妃さまを一人だけにして，心を悩ませた上で，亡き者にし申そうとしたのだった。そこで，こうして，なんであれ，いいがかりをつけようと，心を砕いたのだ。

二十九

この年の十二月，中還が文尚宮をかたらって，

「少し前，わたしはこっそりと兄を呼んで，母の安否を聞きましたが，あなたのお兄さんは妹の安否だけでも知ろうとなさっていないかと思って，こんなことを申し上げるのです。二人とも外と連絡を取っているということになると，大変でしょうからね。他には絶対におっしゃらないで，尚宮の胸にとどめて，尚宮はお兄さん宛てに手紙を書いてください」

といった。その尚宮はもともと人を信じやすいたちで，中還を平素からかわいがって，その兄がつかまっていたときには米に魚，そうして着る物までを与えて面倒を見ていた。そこで，その恩恵を重く感じているふりをして，中還はつねづね，

「尚宮の恩恵は死んで土中に入っても忘れることはできないもので，けっしてお返しすることのできないほどです」

といっていた。そういった間柄であったから，文尚宮はいっさい疑うことをせず，兄の文得覧宛てに手紙を書いて与えたので，中還はさっそく返事をもらって来た。

本殿の監察尚宮の召使いであるプチョンと，天福の召使いである恩徳が，中還の腹心となって，いっしょに手柄をあげようと，夜昼いっしょになって，見たことはどんなことでも報告したので，中還は夜になると塀を越えて，逐一話しにいく。

大妃さまのいらっしゃるのは御殿の東の隈で，中還がいるのは西南の渡り廊下だった。よその御殿に通じているのは西側だし，東と西の両方をよく知っている人間が多勢死んでしまったため，宮中はがらんとして，晩になるとまったく人目がない。万軍が出入りしたところで，わかりようもないくらいだった。中還はいよいよ

あやしく立ち回って，大妃さまに向かっても悪口し，獄につながれて行く女房にも吐き捨てるように，

「安閑に生きることができず，こうした過ちを犯して，悲しい目に遭うというのも，全部が全部自分たちのせいだ」

といった。

三十

裏でこのようなことをしながらも，中還は文尚宮のところに知らんぷりの泰然自若たるさまで出入りしたが，尚宮もまた少しも疑おうとはしない。人が中還は天地を畏るべきことを知らず，裏切りの心を抱いているとでもいうと，

「あれはそんな大それたことを考えるわけがないのに，人は憎んでそんなことをいうのだ」

といって，取り合わなかった。

中還がまた，文尚宮に取り入るようにいう。

「侍女の方氏というのは，あちらの御殿に出入りして，うまく立ち回っていますし，わたしの兄は大殿別監をしています。大君の行かれたところに行って，その消息でも聞いて来てもらおうと思うのですが，そんなにむずかしいことでもないでしょう」

尚宮がそれに対して，

「いったいだれが，大君がいらっしゃるところをどこと知って，その恐ろしいところと通じようというのですか」

というと，中還は，

「わたしの兄に往来させようと思うのです」

と答えた。大君の消息を知りたい一心で，手紙を書いて，大妃さまに申し上げる。

「信じていいつてがあります。それに大君の安否を調べさせていますので，すぐに消息が知れましょう」

大妃さまが，

「だれがそのようなことをするのか」

とおっしゃったので，

「中還の兄が行って，愛一のところに参りました」

とお答えした。すると，大妃さまは驚いて，

「そのようなことは即刻やめるがよい。消息を調べて知らせてくれる恩恵は天のように思うけれど，わたくしたちが通じているという事実が知れたら，あちらはさらに権勢を笠に着て，いっそうこちらに禍が及ぶのではないかと恐れます。今より後は，そのようなことは考えもしないがよい。確かに，悲しみは尽きることもないが，大君も，たがいに生きてさえいたなら，自然と近況を知る機会もあろうというもの。わざわざ危険を冒して，消息を通じたりしてはならない」

とおっしゃった。それに答えて，

「この下人は昔から順直で，わたくしがいろいろと恩をほどこしていますので，害心を抱くことのないものです。信じてください」

といった。

その後，いつも手紙のやり取りをするようになって，そのたびに，くれぐれも他に洩れないようにと頼みこんだ。

愛一の手紙に書かれているのは，

「わたくしが死ぬ目に遭うこともなく，監禁もされず，安閑と座しているのに，国母さまと尚宮さまたちが苦しみを経験なさっているのを考えると，とても心配で，悲しみははかり知れません。たとえ女人の身であっても，大妃さまのために何かできないものかと考えておりましたところ，大君の安否を御存知ないことを知りました。ならば，死力を尽くしてでも何とかいたしましょう。弟が別監として大君に従って行きましたから，手紙を書いてくだされば，年若いお付きの尚宮にでも，そっと手渡し，返事を受け取って来るようにいたします」

ということだった。文尚宮はうれしくて，大いに喜んだ。大妃さまが大君の消息を得られず，いつも悲しんでいらっしゃるのを，一度その鬱々たる思いを散じて進ぜようと思っていたものだから，愛一の手紙を持って，卞尚宮のもとに行った。卞尚宮はとてものことに驚いて，怒って言い出した。

「文家と金家の尚宮がたがいに憎しみ合うことは，あたかも敵国同士のようにはなはだしい。外と通じて手紙を受け取ったとしても，このような大事で，どうして大君の安否を知ることができるというのか。このようなことを考え出すのも，至極なる忠誠心の現れだとは思うものの，事実が発覚すれば大事が出来する可能性があります。もうこんなことは言い出さないでください」

三十一

文尚宮も怒り出して，

「どうしてそんなことをいうんです。わざわざこちらから人を呼んだのではなく，信頼できる筋だとわかったのです。あなたもそのようなお疑いは無用です」

といって，大妃さまのもとに進み出て，今の話をすべて申し上げた。大妃さまはオンドルの床にうっ伏して，哀慟なさる。

「江華島に子どもを移すなど，考えもつかなかった。世間がどう動いているか何もわきまえない子どもを島送りにするとは，この悲しみはいったいどこにくらべるものがあろう。わたくしは一人安否を知らず，夜昼となく悲しみにくれていて，どうして安否を知りたくないというわけがあろう。愛一がみずから調べて来ようとするのは，うれしさが限りないが，きっと愛一は功を誇ろうとするでしょう。手紙を書いて渡すことはしますまい」

そうおっしゃるのに対して，文尚宮がふたたび申し上げる。

「内外に信ずるに足る人で，愛一ほどの人はいません。大妃さまのためにもきっと忠誠を尽くす人で，もし功を誇ろうとするような人物だったら，わたくしがこれほどまで推賞いたしましょうか。そういうことなら，愛一をではなく，わたくしを信じないから，手紙を書いてくださらないのだと，わたくしは思ってしまいます」

卞尚宮が申し上げる。

「やはり信ずることのできない人物なのです。中還という者は凶々しい心で以て，死んだ女房や大妃さまを陥れようと，どんなことでも粗さがしをして，訴え出ました。悪だくみをして，自分の妹を晩夏，夜昼となく外に立たせて，ちょっとした過ちでも探し出して，大きな禍を無理やりにでもこしらえようとしたのです。大妃さまはどうか我慢なさって，大君の消息を知ることはおあきらめください」

そう，くり返して申し上げるので，大妃さまも，

「わたくしもそう思います。なつかしく，悲しい情としては，すぐにでも手紙をやりたいのだが，後がとても恐ろしくて，できません」

とおっしゃった。卞尚宮が，

「まったくその通り，危ないお考えはお持ちになりませんように」
と申し上げると，文尚宮がくり返し，
「手紙をお書きください」
と申し上げた。卞尚宮が，
「わたしは差備門にまで行って，声をはり上げていいましょう。それを黙って，聞いていてください。それにしても，どうして，こんなことをなさろうというのか」
と重ねていうと，文尚宮は大いに怒って，
「あなたは大妃さまにお仕えするのに，まことに精誠至極であると考えていましたのに，今度のことで考えると，まったく精誠なるお気持ちなどはなきに等しい。夜昼となく哭泣にひたり，水をお飲みになるだけで，大妃さまは御実家と大君の安否を知りたいと熱望なさっている。しかるに，まったくもって隙がなく，やっとこのような善良な人間を得ることができた。それだけでもたやすくはないのに，それをみすみす機会を失おうとなさる。どんなことでも，このわたくしが胸の中で承知してやりますので，邪魔だてせずに，放って置いてください」
といって，怒りを発し，部屋に帰って，手紙を書き上げ，卞尚宮に見せた。
その手紙に書かれていることは，
「大妃さまは大君を遠くへお行かせし，その御消息も御存知ありません。信ずるに足る人が発案して，大君の御消息を知ろうと手紙を書いて見ますが，御病気におなりにならないよう，よくお仕えしてください。何であれ，大君が召し上がりたいものがあったら，手持ちの物を下人に与えて買いに行かせ，お召し上がりになれるようにしてください。なんとかよく我慢をして，お仕えするように。禁門がいずれ解ければ，消息が聞けるようになりましょう」
というものであった。

三十二

中還は塀を越えて外と通じていて，自分の道具はすべて持ち出して介屎のもとに送り，着のみ着のままの身体だけをこの御殿に残していた。
文尚宮に手紙を書いたら渡してくれといっていたので，文尚宮は手紙に封をして渡しながら，返事をもらって来るようにいった。

中還の心根のよくないことを知って，卞尚宮が文尚宮に，

「そんなことをしてはだめです。手紙を取りもどしてください。いろいろな噂があるので，手紙は渡してはなりません」

というのだが，文尚宮は，

「人は恨んでそのようなことをいうのでしょうが，中還に限って，そんなわけはありません」

といって，取り合おうとしない。

「告げ口するようなことがあれば，大事が起こるので，早く行って，取りもどして来てほしい」

と再三いいふくめて，ようやく行かせたが，中還もさるもの，

「下僕に仕事をいいつけている間に，兄がやって来まして，お手紙は持って行って，もうありません」

と申し上げた。何度も返してくれるよういったものの，後には大声を出して怒り出す始末。

手紙は封を切って読み，隠して，持っていないとしらを切りながら，けっして返そうとはしなかった。

卞尚宮はもう文尚宮を信用せず，あえて渡すことはせず，間に自分の兄のチャチュンリョンに入ってもらい，介屎に賄賂を渡したりしたのだが，新たに内外の人びとを，十二月の大晦日に獄に下し，甲寅の年（1614）の正月そうそうから尋問を始めることになった。文尚宮に許可を得たとして，自分の実家と連絡を取ろうとした者たちはすべて捕えられてしまった。

文尚宮が中還をなじって，

「お前にはさまざまな恩恵を与えたではないか。寒さと暑さをわたしによってまぬかれ，腹をすかし，喉が渇くのだって，わたしのおかげで知らずに過ごして来たはずだ。お前の兄が監禁されて死にそうだったときも，わたしが可哀想に思って，飲食や着る物を与え，生き返らせたのだ。それをお前は，わたしを陥れて手紙を書かせた。わたしも人として，国母がお悲しみになることが限りなく，何とかお喜ばせしようと，ついつい手紙を書いたが，お前という人間は，わたしを裏切るだけではなく，大妃さままで裏切ったのだ」

といった。

中還はのたうち回って泣き，胸をたたき，手を打って，

「本当にこのわたくしが告げ口をしたのなら，今すぐにでも，死んだ親の死体を切りさいて，なますを作り，食べたってよろしいです。わたくしじゃありません」

と誓って，さらに大声を上げて泣いたものだから，それを見ている人びとはみな，中還は無実だと思いこむほどだった。

中還が門のすき間から家具などをこっそり持ち出そうとして，夜明け近くまで，こそこそと出入りしていたとき，色掌のシチョンはそれを見ていて，すぐに事が露顕するだろうにと思っていたが，中還はなんら罪されることもなく，どさくさにまぎれて，貴重な物を盗み出してしまった。

中還を始めとして，恩徳，プチョンの三人が捕えられて，外に出されることになったとき，中還は顔色に喜色が現れるのを隠せず，他の二人の下人にも早くしろといって，泣きさけぶふりをしながら，いそいそと出て行った。

三十三

中還はよくぞ告発した，けなげな者だということで，罪人としての扱いをされず，馬に乗せて，推鞫庁に引き連れて行かれ，お白洲に座らされた。あらかじめ用意して置いた言葉で尋問し，係りの官員とも打ち合わせて置き，荒唐無稽の嘘をこしらえた。文尚宮が愛一に書いた手紙や，江華島に宛てて書いた手紙に手直しをし，でたらめな言葉を書き加えて置いたものが出された。唐将に頼みこんで，自分たちの御殿の門をたやすく開いてくれるよう懇願する言葉を加え，また，江華島に送る手紙には，大君はすこやかに成長なさって，唐将がやって来て門を開けたら，すみやかにお帰りくださいと，まったく根も葉もないことを，心のこもった調子で書き加えて，推鞫庁に提出した。これを示しながら，さらに中還に，

「これこれのまじないをしたというが，違いないか」

と詰問すると，中還は，

「確かに，その通りです。大君のいらっしゃったところでは，わたし自身がすべて行ったのです」

と答えた。

「これらの告発の内容ははたして正しいのか，お前ははっきり知っているのか」

と尋ねると，中還は，

「はい，存じています」
と答えた。
「いったい，あちらの御殿では，何のために祈っていたのだ」
と誘い水をかけると，
「光海君を亡きものにしようと祈ったのです」
と答える。
「その祈る様子というのは，どんなだったか」
「香炉に香をたき，香盒を置き，菓子や餅やくだものを供え，花束を供え，沐浴し，まごころをこめて祈りました」
「お前がその眼で見たのだな」
「わたしがこの眼で見ました」
すべてをみずから見たこととして白状して語った。
屋内で尋問しているのを，床下で聞き耳を立てている者があるのを知って，とんでもない嘘をつくところではやはりいささか後ろめたいのか，声をひそめて，問事郎庁がやっとわかるくらいの声で告げた。
御殿で少しでも疑いのある人たちをみな讒言したが，その名の挙がった人びとは身体を汗が流れ，座ったり立ったり，すっかり正気を失い，身ぶるいし，足を動かして地面を踏むことすらできず，側に立っている人間も恐怖で，他人のこととは感じられなかった。
その間，行って座り，耳を傾けて聞き，名が呼ばれるときに，それが自分の名でなければ，ほっとして，いささか生きた心地を取りもどすのだった。

三十四

宮中全体が新たに騒いで，女房たちがすべて差備門に向かい，命令の出るのを待っていた。外で，文尚宮の兄と甥，男女の僕四人，それに母親を合わせて極刑に処し，さらに愛一には毒薬をたまわって，殺した。
門の隙を縫って通じた侍女の崔氏，崔氏の父の崔スイル，そして中還の兄などがたがいに通じたとき，その様子をうかがっていた男，徐応祥の夫妻と，門の下に来て座っていた書吏らをまた新たに獄に下し，処刑してしまうことをいっそう盛んに行った。甲寅の年（1614）の陰暦二月十五日が過ぎ，文尚宮と差備門の召使いのヨ

ンファ，色掌のシチョンをすべて捕まえ，その二十日の後には，公主の保母尚宮の権氏と侍女の崔氏，さらに侍女の崔氏と差備門の召使いのチュンヒャン，大君の養育係りの下人である春丹や千金などをすべて捕まえ出し，囚人の服に着せかえた。一人の者が幼い子どものようにつっ立ったままだったので，他の者が服を着せかえてやろうとしていると，

「手間取るようなら，宦官を何度でも遣って，すみやかに捕まえ出せ。のろまな者は引きずり出してでも，獄に下せ」

といって，人の足が地につかないほどに急がせ，哭き声が天地を震動させた。医女の五，六人が部屋に入り込んで，

「早く出せ」

と催促し，差備門の中には宦官が入り込んで，

「早く出せ」

と催促した。宮中は不平が充満したが，このような中で人にどうして尊卑をわきまえる余裕があったろうか。

こうして，色掌の女房はことごとく引きずり出された。捕縛の者が，

「どうして罪人を捕まえるのに時間がかかるのか」

といって，あまりにおびやかすので，飛んで走って逃げ，屋内の厠にかくれたり，床の下にかくれたりする者もいる。

宦官たちも

「監察尚宮は色掌尚宮をみなひきずり出せ」

と叫んでいる。

女房たちが，

「わたしたちはこれから死にに参ります。この最期のみまかる場であえて一つだけお願いします。少しの御猶予を」

といって，医女たちに懇願するが，他から，

「早く出すのだ」

とどやす声がする。医女たちもそれが恐ろしいので，

「どこに上って行こうとするのです」

といって，後ろから女房の髪の毛を引っ張るので，女房の頭がそっくり返って，声を出して泣いて，

「どうして，このように悲しませるのです。大妃さまにお仕えする侍女として，

医女に髪の毛をつかまれるなどと，これまでいささかでも考えでもしたことだろうか」

といった。そうして，医女たちを叱りつけて，

「そんなにわたしたちを殺したいのだったら，さっさと捕まえ出すがよい」

といった。

このようにせっつかれ，女房たちが辱しめられることは一，二度のことではなかった。

「誣服などをして，子どものいない児女同然の身ではないか。大妃さまは無実なのに，変に遭われたのだ。たとえ極刑となり，いろいろと責められたとしても，誣服などするものではない。人に生きながらえようとする気持ちがどうしてないことがあろうか。確かに，生きながらえたいものだが，国母さまが悲しい目にお遭いになり，冤罪が僕にまで及ぶことになってしまった。この悲しみは天が必ず知ることで，今は死が祝福される天国にあたかも帰って行く者のように，死に行くことにいたしましょう」

そう言葉を残して，医女に追われるように差備門から出て行ったが，そこには羅将や都事たちが出迎えに来ていて，今度は彼らに追い立てられるようにして去って行ったのだった。

三十五

人を捕まえて出すときは，いよいよ権柄ずくで，宦官や内人たちにはさみつけられるようにして，外に出されたのだった。

侍女であった崔氏のヨオクという者は，庚戌の年（1610）に宮仕えを始め，容貌は美しくはなかったものの，順直な性格であったから，寝室付きとしてお仕えするようになった。その忠勤ぶりもますます人目につくようになり，もともとさかしくもあったので，大妃さまの御実家と大君のいらっしゃる方角に向かって悲しんで，いつもけなげに，

「わたしに翼があったら，すぐにでも飛んで行って，消息を尋ねて，申し上げることができるのに。本当に口惜しいことだ」

といっていた。そうして，また，

「わずかでも隙があれば，わたしは下女の恰好をしてでも出て行き，ふたところ

の消息をきっと聞き出して来ましょうに。ところが，塀も門も鉄でふさいだようで，蟻の通る穴もなく，わたしの力ではどうしようもないのが悲しいです」

ともいったものだった。出て行く日には，さらに悲しんで，自分の脚をさすりながら，

「子どものころから，親にも打たれたことがなかったのに，今になってどうしてきびしく鞭で打たれることになったのか。まったく無実でいらっしゃるのを，けっして誣服などいたしませんが，鞭打たれることを思うと，気が滅入ってしまいます」

といって，聞く者のあわれをさそった。このように忠誠至極であったから，まさか誣服しようとはだれも疑いもしなかった。

いよいよ出て行くときになって，

「わたしをけっして疑わないでください。身体がこなごなになったとしても，国母さまが無実であるのを知って，どうして誣服などいたしましょう」

と，ふたたびいって，推鞫庁に出かけて行った。そこで，自己の事情を訴えて，泣いていった。

「国母さまは無実の事件に当って，幼い大君と御実家の人びとの生死を御存知なく，そのため，夜昼となくお悲しみになっているというのは事実です。しかし，呪いなどなさったというのは，まったくでたらめであることは，わたくしが知っています。いささかでも，このわたくしが見たり，聞いたりしたことがあれば，この推鞫庁のような恐ろしいところに来て，死の憂き目に遭おうなどといたしましょうか。何とか生きのびたく思うもので，それに実際，わたくしが見たり，聞いたりして，あやしかったことなど毛先ほどもございませんでした。重い刑罰を受けるのを恐れて，根拠のない話をしているのではありません」

こうして，六日ほど内需司に閉じ込め，さらに彼女の父と母とを抱き込んだ。光海君の乳母の兄の娘がヨオクの下女で，乳母はその姪をかわいがって，いつも手なずけ，

「こちらにどうして来ないのです。そちらでは福も少なかろう。われわれの方の御殿に来るとよい」

といっていたが，このときに，中還にすすめて，この侍女を捕まえさせて，別の監獄に閉じ込めて，

「打ち合わせた通りにお前が返答すれば，お前を助けようではないか」

といったものだった。しかし，ヨオクは泣くだけで，何日の間も心を開くことがなかった。そこで，その父と母とを，夜昼となく，一つ所でさいなんだので，父母がたまらず，

「お前がしらを切り通せば，われわれすべてが死ぬことになる。国母さまへの恩情は重くて，実の父母の生命は重いとは思わないのか。お前が今，あえて誣服しないとすれば，われわれはお前の眼の前で死ぬことになるだろう」

といった。このような父母の請願を受けた後に，推鞫庁へ入って行き，新たにきびしい尋問を受け，その尋問に対して，前日とは違って，何とも無惨な言葉で答えたのだった。

「すべて，お尋ねになった通りです」

「どうして，それがわかるのか」

「すべて，このわたくしが見たり，聞いたりいたしました」

こうして，ヨオクはすべて尋ねられるままに，答えたのだった。

三十六

この後，卞尚宮が病んで，死の間際になって宮廷を下がったところ，ヨオクが釈放されて出て来て，尚宮が息も絶え絶えになっているところを見舞い，事の曲折を静かに話した。

「違うといっても，両親に泣きつかれ，心ならずも誣服をしてしまいましたが，後日，一族が滅びても仕方のない罪を犯して，今なお，おめおめと生きのびています。わたくしの罪は大山のようで，死のうと思っても，生命はねばり強く，死ぬこともままなりません。国母さまをあざむいて，嘘で生きながらえましたが，どんな面目をもって人前に出ることができましょうか。心にもないことで誣服し，たとえ殺されたとしても，けっして恨みはいたしません」

そういって，泣いた。

尚宮のナンという人が壬辰の年（1592）に侍女として宮廷に入り，懿仁王后の時には寝室付きの女房として過ごした。その人品が利口でなく，普通の人たちがなる尚宮にもなれなかったので，先王をお怨みしたが，戊申の年（1608）以後になって，ようやく尚宮になったのであった。この人がたいへん感謝して，おごりもし，国母さまが何事もなく平穏に過ごしていらっしゃるときは，二人のお子さまに対し

て，人並み外れた忠勤ぶりを示したが，癸丑の年（1613）ともなると，大妃さまに向かっても無礼な思わくで動くようになった。自身の妹や姪などをすべて侍女としてしたて，東宮殿や内殿へ送り込み，その宮廷内の権力は堂々たるものとなった。ナンは勢力を得て，満面に喜色を浮かべ，その楽しむことが自然に表情にうかがえた。それを見る人たちは口惜しく，憤りを抑えることができなかったが，ナンの力を恐れて，何も言い出せなかった。

ナンは得意そうにいった。

「光海君に贈り物をたくさん差し上げていたら，こんな目に遭ったでしょうか。世子の嘉礼があったときに，世帯道具をたくさんくださったが，そのとき，尚宮や侍女たちにも何かくださっていたなら，まさかこんな目には遭われなかったでしょう。侍女や尚宮たちにいつもたっぷりと賞与を与えず，公主や大君を安閑と生きながらえさせることができるものか，楽しみなことだ。その様子を見てみようと，大殿と内殿がたくらんで，こうしたことが出来したのです」

また，言葉を続けて，いった。

「懿仁大妃が生きていらっしゃったときにも，光海君には世子としての孝心がなく，心の寛さもなかった。丁酉の年（1597）の乱を避けて水原に行かれたとき，光海君はお車を連ねて，川を渡ることになって，船を用意させ，御自分と嬪とはまずさっさと渡って，幕を張らせて，その中に座して楽しんでいた。こちらの方はふり返りもせず，侍衛する内官がいくら叫んで，船をこちらの岸に呼びもどそうとしても，船を送り返そうとはしなかった。権力を自分たちだけのために使い，こちらのことは考えもしない。自分たちは宵の口にさっさと渡り，こちらは真夜中になってようやく渡ることができたが，日和は寒く，夜は深く，露が降り，霜を迎えるありさまであった。もし，光海君に孝心というものがわずかでもあったとしたら，どうして嫡母の懿仁大妃にそうした仕打ちができたであろう。まして，自分の生母が早く死んで，実の母として，実の息子同様に育てなさったのではなかったか。にもかかわらず，情愛らしいものが全然ないというのは，本来，人としての孝心とか精誠とかのない人と知るべきであったので，今，あのような残酷な本性をあらわにして，傍若無人もはなはだしいが，今となっては何もかも手遅れだ」

ナンは，いけないことだとは知っていながら，おもねって，中還といっしょに行動し，大妃さまの器物などを夜昼となく少しもはばかることなく持ち出した。大君

のお控えの間の物までも盗み出した。自分の僕と中還とで心を合わせて閉じた門を開き，家財道具を盗んで，夜になるとそれを運んで，ナンの妹のコッヒャンのところに行ったところ，コッヒャンは姉のナンを叱りつけて，

「雲の上の方々はたがいに折合いが悪いとしても，下僕の道理として，そむいて，裏切ることなど，してはならないことです。他人がそれをしてもいやなものを，お姉さんが大妃さまの器物を盗んで，わたくしのところに運び込むのは，困ります。今後，いっさいわたくしのところには持って来ないでください」

といった。姉が怒り出して，

「姉妹が姉妹を助けないで，どうするのです。他人じゃないのですよ。大妃さまは大君と御実家のこととで夜昼となく泣いてばかりで，消え入りそうになさっていて，道具などお使いにならなくなった。それに，大君の道具は置いておいても使う人がいなくなったから，不要で，わたしたちに分けてくださったのです。無駄口をたたかないで，受け取って，わたしが暇を取った後にちゃんと使えるよう，しっかり保管して置くように」

といった。そうして，緋緞の匹であれ，銀器であれ，全部を盗み出した。

また，大君の乳母の金尚宮に近づいて，金氏の生命を救ってあげようと持ちかけ，銭糧をいくらかくれれば，知己にでも頼んで，生きながらえられるよういたしましょうといった。悲しいかな，人は生命を貪るもの，いわれるままにいろいろと賄賂を贈ったものだ。われわれは間の門を通って往き来しているのを見逃がすのが口惜しく，我慢できずに人を集めて目を配り，ある日，物を持ち出すのを見つけて，捕まえたが，捕まった中還の方がかえって大声でどなりつけた。

「いったいだれがこのわたしを捕まえようというのだ。お前たちがわたしを捕まえるなんて，一族をみな滅ぼす憂き目を見ることになるぞ」

そういって，かついでいた大きな鍵を振り回すので，こわくなって，静かに出て行くにまかせた。

（続く）